

面です。子どもたちは急な斜面をどんどのぼり、すべってはまたのぼっていきます。すべって降りてくるお友達を目で追いながら、うまくからだをかわして斜面をのぼっては、またすべり降りていきます。見て考えて動いて、それが素早い動きとなって実現する様が、繰り返されます。斜面で転んだ時も芝生なので安心ということもありますが、転んだときはころころと斜面に身をゆだねる子どももあって、子どもたちのからだの柔軟さや運動能力の高さに、大人たちは目をみはるところです。子どもは自分のからだも遊び道具にしてしまうといったことも聞きますが、自分のからだで動いて遊んで、より柔軟なよりたくましいからだを自分自身でつくっていくのだと考えます。からだを存分につかって活動する中で、機敏さやしなやかさも磨かれていく様子です。

うまくすべれると、「せんせい、見て見て!」と声かけて来たり、「いっしょにすべろう!」と友道をさそったりする子どもたちの姿もみることが出来ます。地形や周りの様子を見ながら、自分のすべり方を探求している子どもたちの様子をしっかりと見ることでできた段ボールすべりでした。

3) 凧あげ

凧あげは、作ったもので遊ぶという設定で行いました。作って遊ぶといった設定は、子どもたちに活動の見通しや活動への意欲が育れると考えます。

どのようなものを作ったかという、ナイロンに竹ひご二本の簡単な凧です。竹ひごはテープで止めるので、結構細かな指先の機能も要求されますが、全員が自分の力で製作ができました。思いの絵や文字で子どもたちは飾りつけもしました。

凧あげの実際の場面では、短くタコ糸を手に持ち、グラウンドを走り回る子どもたちが結構な数になりました。それも疲れ知らずです。結構というか長い時間、凧をなびかせ走り回る子どもたちの姿をみることができました。風になびく凧の様子が面白いのか、走ることに爽快感があるのか、子どもたちは疲れ知らずに走るという様子でした。

凧の大空への飛ばせ方ということでは、見本を見せると、子どもたちは集まってきます。そして自分でも挑戦し、凧に風がはらむように凧の状況をしっかり目で追いながらタコ糸を持つ手を上下左右にうまく操作することで、凧が大空に舞い上っていくことを知っていきます。はじめはうまくいなくても、徐々に指先と自分の目で、凧が風をはらみ大空に引張られていく感じをつかみます。かっこよく凧あげをしている友達の真似をしたり、自分でも工夫したりしながら、遊びをマスターしていく。その中で成就感や達成感というもの得ていくのだと思います。

2、あそびと環境

遊び場所の減少や、「あそび」の内容が変わってきたこともあり、からだをつかって思い切り遊ぶことが少なくなってきているといわれます。昔といっても少し前の昭和の時代には、ちょっとした空き地や路地でからだをつかって遊ぶ「あそび」がされていたと思います。遊びの中で身につけた身のこなしや運動能力で、危険から回避する力もつけていったと考えます。現代においても、状況に応じた、それこそ自分の安全を担保できるだけの運動能力の育成が必要となってきています。状況を配慮できるだけの自分を取り巻く環境を把握する力や、状況に対処できる力を身につけていく必要があると考えます。もちろん遊びの目的は、楽しく遊ぶことです。楽しく遊ぶ中で、子どもたちが身につく力はたくさんあると考えます。

環境教育といった観点から、実践事例を通して、活動を支える環境づくりや環境を利用して育むことのできる子どもたちの力とはどういうものなのかを考えてきました。今後も、環境づくりの在り方や環境を利用した「あそび」を実践していくことで、子どもたちの育みをよりいっそう促していければと考えています。

おわりに

来年度からは、春の遊びとして、校内にある自然環境の中に春の恵みや芽生えを探すような学校を探検する活動や、春の心地よい季節に校内の森の中で鬼ごっこ等の活動ができればと考えていま

す。そして夏には、小高い丘の芝生の長い傾斜を利用して、水をつかったのスライダー遊びができればと考えます。もちろん秋には芋ほり、冬には凧あげですが、もっともっと季節を満喫できるような遊びを開拓してもよいと考えます。

子どもたちが四季の季節を感じながら、思い切りからだをつかって、「遊んで遊んで遊びぬく」、そんな遊びの環境の中で、子どもたちが心とからだを育てていってくれればと思います。

それと、遊びの支援にきてくれた学生諸君には、活動への参加を通して、子どもの成長や子どもの内にいっぱい秘められた可能性というものを肌で感じてもらうことができたらと考えます。活動への参加を通して、子どもたちのからだと心の成長を共感できる力を身につけてくれればと考えます。子どもたちと共感する喜びは、学生諸君の今後の成長の糧になっていくと考えます。